

専攻医
の主張

専攻医2年目を迎えて

県立広島病院 消化器・乳腺・移植外科 北村 芳仁

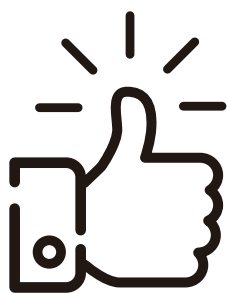
新緑の季節が過ぎ、汗ばむ陽気となりました。県立広島病院 消化器・乳腺・移植外科 レジデントの北村芳仁と申します。私は高校までは京都で過ごし、大学生活は広島で送りました。2020年に広島大学を卒業した後、県立広島病院で初期研修医として2年間研鑽を積み、後期研修は県立広島病院の消化器・乳腺・移植外科の一員として勤務しております。消化器外科医としてはまだ2年目で、毎日学ぶことが山のようであり、忙しくも充実した日々を送らせていただいております。大学時代は剣道部に所属し、勉強よりも剣道に打ち込んでいた学生時代でした。振り返ると遠い昔のことに感じ、剣道部の新入生歓迎会に行く知らない人ばかりで、月日の流れる早さに驚きます。卒業してからは、竹刀を全く握らない生活となってしまいました。

私は学生時代から外科学に興味がありました。薬物治療や放射線治療が進歩している昨今ですが、私にとっては手術をして自分の手で直接患者に触れ、治療できるという外科のダイレクトさが非常に魅力的でした。手術室で術者・前立ち・助手が息を合わせて手術を進める様子や、美しい手技に目を奪われました。「外科医はカッコいいな、自分もなりたいな」と思ったことがきっかけとなりました。

大学を卒業し、県立広島病院で初期研修医として各科をローテートさせていただきました。県立広島病院ではほとんどの科がそろっていて、幅広く、時に専門領域に踏み込んだことも学ぶ

ことができ、充実した研修生活を送ることができました。初期研修前は消化器外科志望でしたが、研修医の立場でローテートすると学生時代よりも経験できることが増え、さまざまな科の興味深い領域がたくさん分かるようになり、専攻科の選択に悩み始めました。ワークライフバランス等も含めいろいろ考えましたが、結局自分がやりたいことをやるしかない、と考えるに至り、「手術がしたい、手術ができなければ一生後悔する」と初心に立ち返って、最終的に消化器外科を選びました。

外科医の入り口に立ってみたものの、自分が外科に向いているかどうかは、正直分かりません。元来要領が悪くて、それほど器用でもなく、なかなか手術手技が上達せずに、去年は悔しい思いをすることが多くて、「他の人が手術した方が患者さんはよくなるのではないか」、「自分が内科に進んだ方が患者さんを幸せにできたかな」ということもありました。しかし、上司の先生方の根気強く丁寧な指導により少しずつできることが増えてきて、1年たってやっと成長を実感できるようになりました。昨年1年間過ごしてみて、外科医に向いているかどうかはまだ分かりませんが、自分は手術で患者さんを治療したいと再確認することができました。しんどいことも多々ありますが、自分が決めた道であり、一つ一つ丁寧に積み上げて、日々精進していく所存です。いつか自分も、あの日憧れていたような外科医の一員になればいいと思います。



Facebook更新中!

もみじ医が広島県医師会のイベント情報をお知らせしています。

フォローして最新情報をチェックしましょう。

